

日本語教育

161号

目次

会長再就任のごあいさつ	1
[研究論文]	
文脈における和語動詞語彙の産出 —中国語母語話者のケース—	森山仁美 2
日本語会話授業の問題点に対する捉え方 —中国の大学における日本語専攻の学習者の場合—	秦松梅 15
スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得 —シンハラ語母語話者の作文に見られる「ガ」を中心に—	永井絢子 31
[研究ノート]	
医療・介護現場の方言を外国人はどう理解するか —他地域出身日本人と比較して—	後藤典子 42
[コラム：海外の学会から]	50
[会務報告，第3回（2015年度）定時代議員総会議決通知，2014年度事業報告・決算， 2015年度事業計画・予算]	56
[投稿規程]	104
[お知らせ] 〈『日本語教育』165号特集テーマ，2016年度春季大会研究発表規定，2015年度秋季大会 プログラム，研究集会予告〉	110

2015 8

日本語教育学会

あとがき

◇161号には、32本
(研究論文19, 調査
報告6, 実践報告4,
研究ノート3)の投稿があり、審査の結果、研究論文3本、研究ノート1本が採用されました。査読システムが変わって5号目となり、この間、採用件数は横ばいで「安定」した状態です。より多くの論者を載せたいという願いの一方で、学会誌として高いレベルを保ってほしいという強い声も聞かれます。そのような中で毎号、学会誌委員と査読協力者は、迷いつつも、真剣勝負で一つ一つの査読に当たっています。採用件数を増やす何よりの方法は、まずは多くの投稿が来ることです。会員のみならずからのこれまで以上に意欲的な投稿をお待ちしています。

今号に掲載された論文を簡単にご紹介します。森山仁美氏の研究論文は、中国語母語話者の和語動詞の習得に関する研究で、知っているはずの基本動詞がうまく産出されない様子と、どのような指導が必要かについてのヒントが多く示されています。秦松梅氏の研究論文は、中国の大学での会話授業の問題点を探り、改善点を提案しています。学生たち、教師たちからの生の意見は、すべての語学教育関係者にとって耳を傾けるべき内容です。永井絢子氏の研究論文は、シンハラ語母語話者(スリランカ人)の作文に見られた格助詞の誤用を分析した研究で、詳細に報告された研究方法は、大いに参考になると思われます。後藤典子氏の研究ノートは、地方の医療・介護現場における方言発話を外国人がどう理解するかを探る研究で、まさに今の日本社会と日本語教育との接点、最前線からの研究成果です。

いずれの論文も、多様な現場からの提言であり、自分とは異なる立場であっても、学ぶべき点が多くあることを改めて感じずにはられません。

日本語教育学会の体制が5~7月にかけて変わり、ホームページでも報告されています。是非ご覧ください。学会誌は学会の活動の中でも重要なものの一つです。学会誌について、また日本語教育における学術研究のあり方について、生産的な議論が構築されることを、積極的な投稿とともに、期待しています。

(M・N)

◇投稿締切日

163号 2015年9月1日(発行2016年4月)

164号 2016年1月12日(発行2016年8月)

165号 2016年5月2日(発行2016年12月)

特集テーマ:

2020年東京オリンピック・パラリンピックの
開催と日本語教育

学会誌委員(◎印は委員長、○印は副委員長)

〈編集担当委員〉

秋元 美晴 ○池上摩希子 久保田美子
◎齋藤ひろみ 澤田 浩子 田中 真理
西郡 仁朗 前田 直子 松尾 慎

○松岡 洋子

〈主査担当委員〉

池田 玲子 池田 隆介 石橋 玲子
伊藤恵美子 今井 新悟 岩田 一成
大関 浩美 小澤伊久美 小野 正樹
金田 智子 川口 義一 河野 俊之
木谷 直之 佐々木倫子 鈴木 智美
高梨 信乃 田中 和美 因 京子
當作 靖彦 中川かず子 浜田 麻里
深田 淳 文野 峯子 許 明子
ボイクマン総子 水田 澄子 三宅 和子
宮崎 幸江 村岡 貴子 森 篤嗣
吉田 妙子

査読協力者(本号担当)

青木 惣一 阿部 新 伊集院郁子
市瀬 智紀 今泉 喜一 宇佐美 洋
大場美和子 小河原義朗 荻原稚佳子
落合 由治 嘉数 勝美 小林 由子
島田めぐみ 菅谷奈津恵 鈴木 庸子
建石 始 玉岡賀津雄 堤 良一
徳井 厚子 戸田 貴子 西口 光一
仁科喜久子 野口 裕之 橋本 直幸
橋本ゆかり 蓮沼 昭子 福田 倫子
藤長かおる 藤原智栄美 本田 弘之
丸山 千歌 水野 義道 森本 郁代
築島 史恵 矢部まゆみ 山内 博之
山崎 誠 山路奈保子 山田 泉
横溝紳一郎 吉野 文 李 在鎬
渡部 倫子

編集協力者

エリック・ロング

2015年8月25日 印刷

2015年8月25日 発行

編集者 日本語教育学会学会誌委員会

発行者 公益社団法人 日本語教育学会

東京都千代田区西神田2-4-1

東方学会新館2F 〒101-0065

電話 (03) 3262-4291

FAX (03) 5216-7552

E-mail office@nkg.or.jp (代表)

gakkaisi@nkg.or.jp (学会誌委員会)

http://www.nkg.or.jp/

会長再就任のごあいさつ

公益社団法人日本語教育学会
会長 伊東 祐郎

2015年5月30日に開催された理事会において再び会長に選出されました。会長の続投に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

日本語教育学会は、2013年4月1日に公益社団法人に移行しました。その直後の会長に就任してからの2年間、公益社団法人としての学会の社会的役割、事業活動等の指針となる理念体系の策定に際しましては、多大なるご理解とご協力、またご助言等を賜り、深く感謝申し上げます。

おかげさまで、本学会の理事を中心に公益社団法人としての使命、学会像、全体目標を策定し公開に至りました。中長期事業計画の概要を掲げ、事業全般の見直しを行うこともできました。また、財政基盤の安定強化策、そして、事業活動については社会貢献の視点から包括的な検討も行っていました。第2期目を迎えた今、これからの2年間は、まず2015年度内に、各事業の中長期事業計画を完成させ、2016年度より、それらのアクションプランを、着手できる所から着実に実行に移していきたいと思っております。

まず、組織とネットワークを強化するために、学会の機能を自律的、戦略的に果たしていけるような体制を整えていこうと考えております。会員、非会員を問わず、すべての日本語教育関係者が斬新なアイデアを出し合い、常に世の中の動きを見据えた思考と行動が取れるようになればと願っております。

第2に、本学会は、学術・実践研究を行う団体ですから、今後も、学術研究の成果が日本語教育のさらなる発展に寄与できるだけでなく、学会員各自の成長実現の場となるような環境作りをめざしたいと考えております。そのために、魅力ある組織でなければなりません。会員間の議論をさらに活性化させ方向性を共有していきたいと考えております。

そして、研究成果をベースとした社会貢献、社会的なニーズや期待に応えられるような学会の体制作りも欠かせません。学会は様々な背景や知識、経験を有した会員から成り立っています。多様性を活力として、また学術研究を通して生まれた知財や人財を活かして、社会貢献活動や国際貢献事業に寄与できる組織を作り上げていきたいと考えております。

私はこれからの2年間で、新生日本語教育学会に課された社会的使命や役割を認識し、学会内外の情勢変化をしっかりと見極め、会員各位をはじめ、関係省庁・関連団体の皆様とも連携しながら、さらなる発展に向けて全力で取り組んで参りたいと存じます。皆様の一層のご協力を切にお願い申し上げます。

文脈における和語動詞語彙の産出

—中国語母語話者のケース—

森山 仁美

要 旨

中国語母語話者を対象に、文脈の中で和語動詞を正確に使用できるかについて検討する。研究課題は(Ⅰ)日本語習熟度によって文脈の中で和語動詞を使用する正確さに違いがあるか、(Ⅱ)「知っている」語であるにも関わらず文脈で和語動詞の産出が正しくできなかった場合、既知語からの検索ができないためか、(Ⅲ)和語動詞産出の過程で、どのような誤用が見られるかである。調査方法として中級レベルの学習者72名を対象に2種類のテストとフォローアップ調査を実施した。調査の結果、(Ⅰ)日本語習熟度が高くなるにつれて文脈の中で和語動詞を正確に使用できる傾向にある、(Ⅱ)和語動詞に関しては理解の知識に比べ産出の知識は遅れて発達する、(Ⅲ)和語動詞産出の過程で(1)母語や意味からの連想による誤り、(2)日本語の漢語を経由した誤り、(3)弱い共起関係による誤り、(4)送り仮名が同じことであることによる誤り、(5)助詞を正しく理解できなかったことによる誤りが見られることが示唆された。

【キーワード】 和語動詞, 漢字, 日本語習熟度, 習得, 誤用

1. はじめに

近年、第二言語習得において語彙習得に注目が集まっている。Nation (2001) は語彙知識を「語形」、「意味」、「使用」と大きく3つに分け、それぞれをさらに「受容的」に知っているか、「発表的」に知っているかの2つに分類している。さらにこの受容・発表知識の区別を語の知識の下位区分にまで当てはめている。すなわち、ある語を知っているとは、その語のさまざまな側面の知識を持っていることであるとしている。一般的に、産出に関わる知識は、理解に関する知識よりも習得が困難であると考えられている。

第二言語の語彙習得の分野で日本語を対象にした研究は、既知語率と文章理解の関係(小森他 2004)、未知語の意味推測 (Mori 2003, Kondo-Brown 2006, 谷内他 2009)、などが挙げられる。これらはいずれも受容面の研究であり、語の産出面を扱った研究は少ない。黒崎他 (2009) では、韓国語母語話者を対象に形容語彙の自由産出での実験を行ったところ、「知っているのに使えなかった」語が確認されている。作文やレポートを書く際、大学進学目的の学生、また大学生にとって、学習した語彙を文の中で効果的に使いこなせる能力が必要とされる。文を作る際、特に動詞が使いこなせないと、たとえ中上級レベルの難易度の高い漢字語彙は出てきても、それらを文として正確に構成できない。三國他 (2008) によると、実際の書き言葉の場面において、例えば「持つ」には「疑問」「関心」「見る」

には「過程」「相違点」など、抽象的な名詞と基本動詞の組み合わせが高頻度で使われていることが示されている。大学教育を受けるのに必要な日本語を学ぶ日本語学習者にとって基本動詞を文脈の中でいかに正確に使えるようになるかという問題は、教育現場において重要な課題である。そこで、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS）を対象に、文脈(注1)の中で既習語彙である和語動詞を正確に使用できるかについて検討する。なお、本研究の「和語動詞」は、秋元（2010）にならい、「研究する」などサ変漢語動詞「～する」や「力(りき)む」などの漢語が由来の動詞、「サボる」などの外来語由来の動詞を除いた日本語本来の語、すなわち訓読みをする動詞と定義する。

2. 先行研究

一般的に、CNSは、他の言語を第一言語とする日本語学習者に比べて、日本語の漢字学習において有利であると言われる。これまでの研究で、漢字という表記法を共有していることから日本語の単語認知や文章理解の受容面において語彙学習に有利であることが分かっている（玉岡1997、茅本2002、三國他2005、山方2008）。また、CNSは読解において文脈の理解に文脈の漢語の含有率が影響を及ぼすこと、日本語習熟度が高くなれば漢字や漢語の影響を受けなくなることが示唆されている（小森2011、大和他2011）。CNSの語彙知識は受容面において有利に働くが、産出面においても同じように有利に働くかどうかはこれまでの先行研究からは明らかにされていない。

CNSの語の産出面の研究は少なく、主に作文調査を通して誤用例が収集されている。例えば、張（2009）では、CNSは漢語の知識に依存するあまり「32人を殺す事件が暴発した」など和語を使うべきところで漢語を用いるという報告がある。これまでCNSを対象とした研究では主に漢語に着目した研究が行われていたが、和語に関して更なる調査を行うことが必要であると考え。基本動詞である和語動詞は日常の言語活動の中で頻繁に使用され、言語習得においては比較的早い時期に学習される項目である。しかしその反面、多義性が高く意味範囲が広いこと、そのため多義性が高くなれば意味境界が不明瞭なものとなり、使い分けが困難になることが指摘されている（Kellerman1979、松田2000）。CNSを対象とした語彙テストの分野でも、名詞や形容詞に比べて動詞は習得が遅いこと、語の上位語・下位語の関係などの連想知識と比べて共起語の関係は習得が遅いことが示唆されている（堀場他2011）。

CNSを対象とした和語動詞の習得に関する研究は、小森他（2012）がある。小森他（2012）では日本語の同義語で中国語と同じ共起語が取れるものと取れないものをどの程度正しく弁別できるかを明らかにするために、正誤判断テストにより調査を行った。その結果、中国語と同じ共起語が取れない語については、日本語習熟度が高くても習得が進んでいないことが示唆された。この研究において、漢語だけでなく和語に関しても中国語の知識を転用する傾向があることが明らかになった。しかし、調査の手法に関しては、正誤判断テストであり受容的な側面が強く、正しい日本語であるか否かの判断はできても、中国語からの転移と断定するのは難しいだろう。

以上の先行研究は、CNSが和語動詞を知っていても文脈の中でうまく使いこなせない可能性を示唆しているが、その原因は明らかにされていない。張（2009）の作文調査では、

使用すべき和語動詞を回避し漢語動詞を使用する恐れがあり、また日本語習熟度の違いによる影響も考慮されていない。和語動詞に関しては文脈の中で他の構成要素との繋がりを把握したうえで論ずる必要があるが(田丸 1999)、連語や助詞を統制した文脈の中で和語動詞を産出させた先行研究はこれまでにない。そこで本研究では、CNSにとって習得が困難とされる和語動詞の産出面について日本語習熟度を考慮して検討する必要があると考える。

3. 研究課題

本研究では、CNSを対象に、文脈の中で既習語彙である和語動詞を正確に使用できるかについて検討する。具体的には、(I)日本語習熟度によって、文脈の中で和語動詞を使用する正確さに違いがあるか、(II)「知っている(漢字表記と音韻情報が結びついている)」語であるにも関わらず文脈で和語動詞の産出が正しくできなかつた場合、既知語からの検索ができないためか、(III)和語動詞産出の過程で、どのような誤用が見られるか、という三つの課題を設定する。

4. 調査の概要

4-1 学習者

本研究の学習者は、国内の日本語学校、大学に在籍する中級レベルのCNS72名である。SPOT(注2)の平均点32.7点を基準に上位群と下位群を分けることにした。このテストの結果により、SPOTで33点を上位群、33点未満を下位群としたところ、上位群の学習者は36名、下位群の学習者は36名になった。上位群と下位群の得点差を*t*検定により検討したところ、0.5%水準で有意であった($t(70)=12.00, p<.05, d=2.86$ 効果量大)。

4-2 材料

4-2-1 調査対象語彙

テストで取り上げた語は、以下の表1に50音順で示した40語である。旧日本語能力試験3級レベルの和語動詞とした。

表1 対象語

遊ぶ・集める・歩く・洗う・言う・起きる・行う・教える・覚える・泳ぐ・終わる・通う・借りる・決まる 壊す・調べる・育てる・倒れる・確かめる・出す・頼む・食べる・続ける・届ける・逃げる・飲む・入る 運ぶ・走る・働く・払う・広げる・曲がる・負ける・待つ・見える・休む・呼ぶ・読む・忘れる
--

選定にあたっては、「日本語能力試験過去問題集」と「日本語能力試験準拠問題集」に掲載されている語とした。また、単語親密度はNTTデータベースシリーズ「日本語の語彙特性」を参照し、文字音声親密度が5～7の比較的馴染み度が高いものとした。

4-2-2 テスト

文脈テスト、動詞単語テストの2種類のテストを用意した。文脈テストは、文脈の中で和語動詞を産出させることを目的としたテストである。文脈から対象とした動詞のうち語

幹の1字(注3)が示されていない状態で、和語動詞を推測し正しく書かせる空所補充問題形式とした。表2を参照。文脈は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)と『日本語基本動詞用法辞典』を参照し、すべて初級語彙を使用し単文で提示した。名詞と動詞のコロケーションに関しては、語と語の結びつきが弱いもの(注4)を調査の対象とし、MIスコア(注5)10以下のものとした。また、日本語母語話者4名(うち日本語教師2名)にテストを受けてもらい文脈に適合する動詞が複数にならないようにした。

表2 文脈テストの形式

	文脈の有無	動詞の提示	問題例
文脈テスト	あり	なし	父に車を <u> </u> りる

文脈テストの答えを正しく解答するためには、対象語の音韻情報と漢字表記が学習者の中で結びついているかを確認する必要がある。そこで、動詞単語テストを併せて行った。動詞単語テストは、ひらがなで動詞を提示し、そのひらがなを漢字で書かせる形式である。表3を参照。もし、この動詞単語テストが正解であるにも関わらず文脈テストが不正解であれば、対象語を知っているにも関わらず文脈の中でうまく使いこなせないことが示唆される。

表3 動詞単語テストの形式

	文脈の有無	動詞の提示	問題例
動詞単語テスト	なし	あり	か <u> </u> る <u> </u> りる

4-2-3 手続き

テストは、文脈テスト、動詞単語テストの順で実施した。テスト実施の際、空欄に漢字1字を書くことをテスト冊子の中で日本語と中国語で教示し、さらに口頭でも指示を出した。それぞれ冊子を分けて作っておき、テストが終わったらその都度冊子を回収した。ペーパーテストで解答する形式であり、元の問題に戻ったり、あるいは考えて書き直したりすることもできた。文脈からの語彙推測に十分な時間を与えるため、テストの制限時間は特に設けなかった。その後に学習者の日本語習熟度をチェックするためSPOTを行った。テスト終了後、テスト受験者のうち25名にフォローアップ・インタビューを行った。協力者全員に声をかけ、そのうち時間の都合がつくボランティアの学生が25名であった。内訳は、男子学生14名、女子学生11名であった。インタビューでは、全員に前もって準備していた同じ質問をした。具体的には、なぜその動詞を書いたのか、何が手がかりになったのか、文脈の意味をどう解釈したのか、送り仮名や助詞に注意を払ったか、自分の解答に自信があるかである。インタビューは個別に行い、回答はその場でメモをし、1人あたり平均約5分の時間を要した。

5. 結果

各テストの学習者の得点の平均と標準偏差を表4に示す。

表4 各テストの学習者の習熟度別得点の平均と標準偏差

	文脈テスト	動詞単語テスト
上位群	28.72(71.8%)	35.58(89.0%)
標準偏差	14.38	10.43
下位群	21.14(52.8%)	29.36(73.4%)
標準偏差	13.93	18.51

40点満点 ()内は正答率

文脈の中で正しく動詞語彙を使用できる能力と日本語習熟度の影響を検討するため、文脈要因（文脈テスト、動詞単語テスト）と日本語習熟度要因（上位群、下位群）の2×2の繰り返し二元配置の分散分析を行った。文脈要因は学習者内要因で、日本語習熟度要因は学習者間要因である。分散分析の結果、文脈要因の主効果が有意であった ($F(2, 140) = 413.93, p < .05, \eta^2 = 83.68$ 効果量大)。また、日本語習熟度要因の主効果も有意であった ($F(1, 70) = 38.96, p < .05, \eta^2 = 7.88$ 効果量大)。さらに交互作用が有意傾向にあった ($F(2, 140) = 3.37, p < .05, \eta^2 = 0.68$ 効果量大)。多重比較の結果、上位群でも下位群でも文脈テストと動詞単語テスト（文脈テスト < 動詞単語テスト）の差が有意であった。

また、日本語習熟度によって文脈の中で和語動詞を使用する正確さに違いがあるかを検討するため、文脈テストを SPOT と比較すると、全体の学習者の相関係数は 0.736 で強い相関があった。このことから、日本語習熟度が高くなるにつれて、文脈の中で動詞語彙をより正確に使用できることが確認された。

項目ごとに見ていくと、漢字が正しく書けたにも関わらず文脈の中で正しく産出できなかった項目があった。文脈テストと動詞単語テストの正解者数の差が大きい項目を順に9つ挙げる。「運ぶ」「届ける」「広げる」「借りる」「集める」「走る」「確かめる」「働く」「頼む」である。例えば、「運ぶ」という漢字が書けた人が48名（上位群30名、下位群18名）いたにも関わらず、文脈の中で正しく使えた名が上位群3名しかいなかった。残り45名の誤用例として、「部屋に料理を運ぶ」を「学」と書いた学習者が上位群に12名、下位群に8名いた。文脈テストの正解者数と動詞単語テストの正解者数、動詞単語テストで正解したにも関わらず文脈テストで不正解だった調査協力者が文脈テストでどのような動詞語彙を書いて不正解だったのか誤用例を表5に示す。

さらに、誤用を生み出す原因を明らかにするため、テスト終了後に2種類のテストに対しフォローアップ・インタビューを行った。フォローアップ・インタビューから分かった間違いの要因を次の(1)から(5)にまとめる。

表5 文脈テストと動詞単語テストの正解者数と文脈テストの誤用例

	動詞単語テスト 正解者(名)	文脈テスト 正解者(名)	文脈テスト 問題例	文脈テストの誤用例 上段：上位群，下段：下位群
上位群	30	3	部屋に料理を運ぶ	学(12名) 習(2名) 選(2名) 叫(1名) 備(1名)
下位群	18	0		学(8名) 習(4名) 作(1名)
上位群	28	10	家に資料を 届けてもらった	開(2名) 分(2名) 受(1名) 片(1名) 置(1名)
下位群	26	2		受(4名) 書(2名) 整(2名) 貸(1名)
上位群	27	10	机の上に地図を広げる	開(4名) 貼(1名) 図(1名) 掛(1名) 挙(1名)
下位群	23	0		置(4名) 上(4名) 貼(4名) 開(2名) 下(1名)
上位群	34	18	父に車を借りる	乗(7名) 降(6名) 売(1名) 送(1名)
下位群	27	6		乗(8名) 降(6名) 送(1名) 入(1名) 買(1名)
上位群	35	18	図書館で資料を集める	求(3名) 探(1名)
下位群	29	13		査(2名) 調(1名) 探(1名) 収(1名)
上位群	33	20	時速60キロで 車が走っている	乗(4名) 転(1名) 運(1名) 止(1名)
下位群	23	8		行(2名) 来(1名) 守(1名) 乗(1名) 揺(1名)
上位群	29	15	電話でお店の 場所を確かめる	問(2名) 知(1名) 明(1名) 予(1名) 書(1名)
下位群	16	4		聞(3名) 問(1名) 掛(1名)
上位群	34	22	毎日五時まで店で働く	開(6名) 行(2名) 書(1名)
下位群	29	17		行(4名) 開(3名) 閉(3名)
上位群	15	10	部長に仕事を頼まれた	任(2名) 止(2名)
下位群	9	3		分(2名) 配(1名)

(1)母語や意味からの連想による誤り

例)「赤ちゃんが夜中三時に生きた」(正解：起)

(2)日本語の漢語を経由した誤り

例)「毎日五時まで店で開く」(正解：働)

「電話でお店の場所を確かめる」(正解：確)

(3)弱い共起関係による誤り

例)「家に資料を置けてもらった」(正解：届)

(4)送り仮名が同じであることによる誤り

例)「部屋に料理を学ぶ」(正解：運)

(5)助詞を正しく理解できなかったことによる誤り

例)「父に車を買る」(正解：借)

フォローアップ・インタビューから、誤用を生み出す原因となったものは、5つ考えられる。まず、母語や意味からの連想が強く、正しい動詞の産出に至らなかったことである。例えば「赤ちゃんが夜中三時に起きた」では、「赤ちゃん」と意味的に関連がありそうな中国語の「出生」(日本語で「産まれる」)を連想し、その漢字表記の一部である「生」を

解答した学習者が数名いた。「分からなかったので、意味から考えました。」というコメントが多かったことから、中国語の語彙知識を活用し、文脈に当てはまる動詞を連想したことが分かる。

2つ目に、日本語の漢語を経由した誤りがあった。例えば「毎日五時まで店で働く」では、文脈に使われた「店」という単語から「開」と書いた学習者が上位群6名、下位群3名、「閉」と書いた学習者が下位群3名いた。学習者が「開店する」や「閉店する」を連想したとコメントしていたことから、「開店」「閉店」という日本語の漢語を経由していたことが分かる。また、「電話でお店の場所を確かめる」では「予約する」という漢語を経由した学習者は「予かめる」と解答していたのに対し、「確認する」という漢語を経由した学習者は「確」の漢字から「確かめる」を思い出したとコメントしている。このことから、日本語の漢語を経由した場合、正解に至る場合と至らない場合があることが判明した。

3つ目に、弱い共起関係による誤りが見られた。テストの文脈は共起度数が低いものを使用していたため、例えば「家に資料を届けてもらった」を「置」と書いた学習者がいた。フォローアップ・インタビューでも、「資料は『届けます』ではなく『置きます』です」「『資料』じゃなくて『荷物』だったら解答できた」などのコメントがあった。

4つ目に、送り仮名が同じであることによる誤りが見られた。例えば、「部屋に料理を運ぶ」を「学」「選」とするなど、送り仮名の情報から文脈とは異なる動詞の意味を恣意的に結びつけている事例が確認された。誤用例を見ると、「学」と書いた学習者が20名(上位群12名、下位群8名)、「選」と書いた学習者が上位群2名であった。「学ぶ」と書いた学習者3名にインタビューしたところ、文脈の語彙や助詞を見ても当てはまる動詞が思いつかなかったので送り仮名が「ぶ」となる「学ぶ」と書いたと全員がコメントしていた。「選ぶ」と書いた学習者も「漢字を書くとき迷ったから送り仮名を見て『選ぶ』と書いた。」と答えていた。

5つ目に、助詞を正しく理解できなかったことによる誤りである。例えば「父に車を借りる」では、助詞「に」の解釈を間違えたことで、文脈の意味を取り違える例が見られた。また、フォローアップ・インタビューの中で「助詞は見ません」というコメントが下位群学習者の中に数名見られた。

6. 考察

以上の結果をもとに、研究課題ごとに考察を行う。まず、研究課題(I)日本語習熟度によって、既習語彙を漢字文脈の中で使用する正確さに違いがあるかについて検討する。文脈テストをSPOTと比較すると、強い相関があったことから、日本語習熟度が高ければ文脈の中で動詞語彙をより正確に使用できることが確認された。また分散分析の結果から、日本語習熟度によって、既習語彙を漢字文脈の中で使用する正確さに違いがあることが確認された。Mori (2003), Kondo-Brown (2006), 谷内・小森 (2009) で未知語の意味推測は、第二言語習熟度の高低が影響を及ぼすことが示されている。未知語の意味推測などの受容面だけでなく、文脈の中で適切な対象語彙を産出できる能力も日本語習熟度が関係することが分かった。

次に、研究課題(II)「知っている(漢字表記と音韻情報が結びついている)」語であるに

も関わらず文脈で和語動詞の産出が正しくできなかつた場合、既知語からの検索ができないためかについて検討する。上位群、下位群ともに文脈テストと動詞単語テストの間で有意な差が確認された(文脈テスト<動詞単語テスト)。このことから、漢字表記と音韻情報が結びついているにも関わらず文脈で和語動詞の産出が正しくできなかつたことが分かる。文脈の中で正しい動詞を使用させる文脈テストでは、学習者は既知語全ての中から適切な語を検索しなければ対象語の産出はできない。文脈の意味、文法、連語などの知識が必要とされる上、検索の過程を経なければならないので、難しかったと思われる。一般的に語の使用は語の意味理解より遅れて発達することが分かっており、黒崎他(2009)の形容語彙の産出実験と同様、和語動詞においても漢字で正しく表記することができ音韻情報が結びついているにも関わらず文脈の中で正しく産出できなかつた語が確認された。特に、基本動詞は多義性が高く意味範囲が広いので(Kellerman1979)、既習語彙であっても学習者にとって産出は難しかったと思われる。

次に、研究課題(Ⅲ)和語動詞産出の過程で、どのような誤用が見られるかについて検討する。フォローアップ・インタビューの結果、和語動詞産出の過程で誤用を生み出す原因は、(1)母語や意味からの連想による誤り、(2)日本語の漢語を経由した誤り、(3)弱い共起関係による誤り、(4)送り仮名が同じことによる誤り、(5)助詞を正しく理解できなかったことによる誤りが挙げられる。まず、母語や意味からの連想による誤りに関しては、母語や意味からの連想が強く、正しい動詞の産出に至らない事例が確認された。例えば「赤ちゃんが夜中三時に生きた」という表現は、日本語には存在しない。フォローアップ・インタビューで中国語の「出生」を連想したというコメントがあったことから、おそらく「赤ちゃん」という単語から中国語の「出生」を連想し、それに対応する和語動詞を産出しようとしたと推測される。中国語の「出生」と日本語の「出生」は、同形語である。しかし、日本語の「出生」は人が生まれたことを客観的に表し「出生届」「出生地」のように事務的に使われることが多く、「赤ちゃんが夜中三時に出生した」という表現は日常的にあまり使われない。このことから、この例では文脈の中で和語動詞を産出する過程で中国語の知識が影響したと考えられる。CNSは語の産出面において、母語や意味から文脈にあう中国語を連想し、その漢字表記の一部を誤って産出したことが示唆される。

2つ目に、日本語の漢語を経由した誤りに関しては、フォローアップ・インタビューより文脈に使われている漢字から日本語の漢語を経由していることが確認された。さらに、漢語を経由した場合、正解に至る場合と至らない場合があることも分かった。日本語の漢語動詞「予約する」に関しては、それに該当する和語動詞が存在せず、漢語動詞でなければ成立しない。一方、「確認する」に関しては、「確かめる」という和語動詞が存在し、「確」という漢字1字を共有する。これらのことから、CNSは文脈の中で和語動詞を産出しなければならない場合、該当しそうな日本語の漢語を検索し、和語と漢語で共有すると思われる漢字1字を解答していると推測される。小森他(2012)は和語動詞の受容面において中国語の知識が影響していると示唆している。本研究で、和語動詞の産出に関しては中国語の転移だけではなく、日本語の漢語の知識も影響していることが新たに分かった。また、「確認する」と「確かめる」のように漢字1字を共有する漢語を経由した学習者は正しい和語動詞産出に成功し、「予約する」のように対象語の漢字を共有しない漢語を経由

した学習者は正解に至らないことが新たに分かった。

3つ目に、弱い共起関係による誤りに関しては、項目ごとに見ていくと、漢字表記と音韻情報が結びついているにも関わらず文脈の中で正しく産出できなかった項目があった。例えば「家に資料を届けてもらった」の項目では72名中54名の学習者が動詞単語テストでひらがな表記から「届ける」という漢字を書けたにも関わらず、文脈テストでは12名しか正しい動詞を使用できなかった。単語や文脈の意味が分かっても動詞の産出まで至らなかった原因の1つとして、「資料」という名詞に対し共起関係の強い動詞が、「届ける」以外に多数候補に挙がるからだと思われる。「資料を届ける」より共起度数の強いものとして例えば「資料を集める」、「資料を配る」など、動詞の候補が多く存在する。フォローアップ・インタビューでも、「資料は『届けます』ではなく『置きます』です」「『資料』じゃなくて『荷物』だったら解答できた」などのコメントがあった。学習者の中には「荷物」＝「届けます」など、結びつきの強い名詞と動詞で覚えているため、他の組み合わせが思いつかなかったケースがあったものと思われる。このことから、名詞と弱い共起関係の和語動詞語彙を産出する場合、対象語より共起関係の強い語しか思いつかず、そのため対象語を思い出すことができない傾向があることが新たに分かった。

CNS にテストを実施する前に日本語母語話者にも解いてもらったが、母語話者は動詞語彙産出に全員正解している。それはなぜだろうか。Pawley and Syder (1983)によると、成人の英語母語話者は言語の規則を知っているばかりでなく、おそらく何千個もの、いわゆる語彙チャンク (lexicalized sentence stems) を記憶しており、それを場面に応じて自在に使うことで流暢に話すことができるのだと指摘している。これらのことから母語話者にテストを解いてもらい全員が正解したのは、母語話者は語彙チャンクを自在に使い分けられるのに対し、学習者は適切に使えなかったのではないかと考えられる。

4つ目に、送り仮名が同じことであることによる誤りが挙げられる。送り仮名の情報から文脈とは異なる動詞の意味を恣意的に結びつけている事例が確認された。例えば、「部屋に料理を運ぶ」に関しては、ほとんどの学習者が自分の解答が間違っていると気づいており、送り仮名が「ぶ」となる「学ぶ」をとりあえず書いて、「部屋で料理の勉強をした」と文を解釈したというコメントが多かった。

5つ目に、助詞を正しく理解できなかったことによる誤りに関しては、助詞による統語情報を適切に使用できていなかったことが考えられる。テストに解答する際に上位群では助詞に注意を払っていた人が多かったのに対し、下位群ではあまり助詞に注意を払っていなかったように思われる。実際、フォローアップ・インタビューでも下位群の学習者が「助詞は見ません」とコメントしていた。桑原 (2008) は未知語の意味推測において日本語習熟度が低い場合、助詞などの統語情報をうまく生かせないと報告している。玉岡 (1997) や三國他 (2005) でも読解など受容面において CNS は文脈の書字に依存する傾向があるため、助詞の用法に注目できないことが指摘されている。今回の調査で、受容面だけでなく産出面においても、助詞の統語情報や用法を正しく理解できない学習者は文脈の中で正しい動詞を産出できないことが新たに分かった。

7. 結論と今後の課題

本研究では、CNSを対象に文脈の中で既習語彙である和語動詞を正確に使用できるかについて検討した。その調査の結果、日本語習熟度が高くなるにつれて、文脈の中で和語動詞を正確に使用できる傾向にあることが分かった。

また、上位群、下位群ともに「知っている（漢字表記と音韻情報が結びついている）」語であるにも関わらず、文脈の中で和語動詞の産出が正しくできなかった語が確認され、CNSの和語動詞に関しては理解の知識に比べ産出の知識は遅れて発達することが明らかになった。その原因として、基本動詞は多義性が高く意味範囲が広いため、既習語彙であっても学習者にとって産出は難しかったと思われる。

さらに、和語動詞産出の過程で(1)母語や意味からの連想による誤り、(2)日本語の漢語を経由した誤り、(3)弱い共起関係による誤り、(4)送り仮名が同じことであることによる誤り、(5)助詞を正しく理解できなかったことによる誤りが見られた。特に、名詞と弱い共起関係の和語動詞語彙を産出する場合、対象語より共起関係の強い語しか思いつかず、そのため対象語を思い出すことができない傾向があったことが新たに分かった。また、和語動詞産出の過程でひとたび漢語動詞を経由した場合、正しい和語動詞産出に成功する場合と失敗する場合があることが新たに確認された。今後どこまで中国語や日本語の漢語の知識が影響するのか検討する必要があることを示唆したという点でも本研究の意義はあると考える。

これらのことから和語動詞を文脈で正しく使用するには、否定証拠が必要であり、どのような文脈の中で使われるのかを常に確認する必要があると言えよう。例えば「借りる」という動詞語彙を指導するにあたり、「車を借りる」のコロケーションだけを教えるのは効果的とは言えない。「父に車を_____」という文脈の中では「乗る」「降りる」は使えないなど、どのような文脈の中で動詞語彙が用いられるかを考えさせる指導が必要である。また、「を」「に」「から」など助詞を意識させる指導も必要である。助詞が「車を借りる」「車に乗る」「車から降りる」など後続動詞に対して意味的な拘束力を持つということをその都度確認する作業が必要である。さらに教室活動でも、今回テストで使用した文脈の中の1字を空欄にした和語動詞を使わざるを得ないような問題形式を使用すれば、動詞語彙がどんな文脈で使用されるのかをもっと深く考えることに繋がることになるのではないだろうか。

今後の課題としては、文脈テストに使われた項目で適合する動詞が複数存在したことである。テストを実施する前に日本語母語話者に解いてもらい解答が2つ以上存在したものに関しては削除したにも関わらず、「図書館で資料を集める」という項目に関しては、「求」と書いた学習者が3名いた。今後は、「集める」と「求める」など解答が2つ以上存在しない項目を用いて検討する必要があるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、終始多くのご指導を賜りました久留米大学河内千栄子先生に深く感謝いたします。また実験に協力していただきました皆様、大変貴重なコメントによって論文掲載まで導いていただきました査読委員の先生方に心より御礼申し上げます。

注

- (1) 阿部他（1994）、小森他（2007）は、単語認知を促進する効果として、語彙的文脈効果、統語的文脈効果、文脈効果、および談話文脈効果の4つを挙げている。本研究では、意味的に関連のある他の単語の呈示によって当該単語の認知が促進される「語彙的文脈効果」、単語の統語範疇を規定するような句や文レベルの情報が単語認知に促進的に作用する「統語的文脈効果」、単語を意味的に規定する文レベルの情報が当該単語の認知を促進する「文脈効果」の3つ合わせて「文脈」とする。
- (2) SPOT (Simple Performance-Oriented Test) とは、自然な速度で読み上げられる文を聞きながら穴埋めディクテーションする形式のテストである（小林他 1996）。SPOT は高い信頼性を得ており、外在規準のテストとの相関も高い。
- (3) 語幹の「一部」ではなく「一字」を空欄にしたのは、読み方を書かせることが目的ではなく、漢字の和語動詞の習得を見るのが目的だったためである。実際に、文脈テストをひらがなで解答した学習者は1名しかいなかった。また、対象語が旧日本語能力試験3級レベルの語彙であり初級レベルであることから、ひらがなではなく漢字で解答させた。
- (4) 語と語の結びつきには、強さによって3つの段階がある（宮地 1985, 国広 1985, 1997）。最も結びつきが強いのが「慣用句」、次に強いのが「傘をさす」のように固定的なもの、最も緩やかな結びつきは「お茶を飲む」のような自由結合とされている。従来の連語指導では固定的な結びつきが取り上げられることが多く、自由結合はこれまであまり指導の対象とならなかったが表出の際には必要な知識であるため（三好 2007）、今回の調査では「自由結合」を取り上げた。
- (5) 石川（2006）によると、二つの語と語の結びつきの強さを測る尺度の一つとして、MI スコア（相互情報量）が用いられる。MI スコアとは、「期待値（中心語頻度 × 共起語頻度）」で「実測値（共起頻度 × コーパス総語数）」を割り、対数に誘導した数値である。今回のテストでは、名詞と動詞の共起の度合いが MI スコア 10 以下のものとする。

参考文献

- (1) 秋元美晴（2010）『日本語教育能力検定試験に合格するための語彙 12』アルク
- (2) 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五（1994）『人間の言語情報処理一言語理解の認知科学』サイエンス社
- (3) 天野成昭他（1999）『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性（第1期）』三省堂
- (4) 天野成昭他（2000）『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性（第2期）』三省堂
- (5) 石川慎一郎（2006）「言語コーパスからのコロケーション検出の手法—基礎的統計値について」『統計数理研究所共同研究レポート』190, pp.1-14
- (6) 茅本百合子（2002）「語彙判断課題と命題課題における中国語母語話者の日本語漢字アクセス」『教育心理学研究』48, pp.315-322
- (7) 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4-1, 明治書院
- (8) 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店
- (9) 黒崎亜美・松下達彦（2009）「中上級日本語学習者による形容語彙の産出—韓国語母語の学習者の場合—」『日本語教育』141, pp.46-56

- (10) 桑原陽子（2010）「非漢字系日本語学習者の漢字未知語の意味推測における統語情報の利用—中上級学習者のケーススタディより—」『福井大学留学生センター紀要』5, pp.1-10
- (11) 小泉保他編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- (12) 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史（1996）「日本語能力の新しい測定法 <SPOT>」『世界の日本語教育』6, pp.201-218
- (13) 小森和子・三國純子・近藤安月子（2004）「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120, pp.83-92
- (14) 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2007）「第二言語としての日本語の単語認知に及ぼす文脈の影響—二言語混在文の正誤判断における抑制効果の観察を通じて—」『小出記念日本語教育研究会論文集』15, pp.7-19
- (15) 小森和子（2011）「漢語と和語の比率の違いが中国名日本語学習者の文章理解に及ぼす影響」『明治大学国際日本学研究』4(1), pp.1-18
- (16) 小森和子・三國純子・除一平・近藤安月子（2012）「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得—中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較」『小出記念日本語教育研究会論文集』20, pp.49-60
- (17) 財団法人日本国際教育支援協会・独立法人国際交流基金編（2008）『平成19年度 日本語能力試験 3・4級 試験問題と正解』凡人社
- (18) 財団法人日本国際教育支援協会・独立法人国際交流基金編（2009）『平成20年度 日本語能力試験 3・4級 試験問題と正解』凡人社
- (19) 谷内美智子・小森和子（2009）「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142, pp.113-122
- (20) 玉岡賀津雄（1997）「中国語と英語を母語とする日本語学習者の漢字および仮名表記語彙の処理方略」『言語文化研究』17(1), pp.65-77
- (21) 田丸淑子（1999）「専門用語と和語動詞からみた経済記事の語彙」『Working papers on language acquisition and education』10, pp.27-38
- (22) 張麟声（2009）「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140, pp.59-69
- (23) 日本語教育研究所編（1994）『日本語能力試験 対策項目整理 3級問題集』
- (24) 堀場裕紀江・西菜穂子・松本順子・鈴木秀明・李栄・山方純子（2011）「日本語学習者の語彙知識の多面性—中国語母語話者の場合—」『神田外語大学言語科学研究センター』10, pp.49-83
- (25) 松田文字（2000）「日本語学習者による語彙習得—差異化・一般化・典型化の観点から—」『世界の日本語教育』10, pp.73-89
- (26) 三國純子・小森和子・近藤安月子（2005）「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響—読解との比較から—」『日本語教育』125, pp.78-85
- (27) 三國純子・小森和子（2008）「コーパスを用いた論文作成のための慣用的共起表現の抽出」『小出記念日本語教育研究会論文集』16, pp.55-68
- (28) 三好裕子（2007）「連語による語彙指導の有効性の検討」『日本語教育』134, pp.80-89
- (29) 宮地裕（1985）「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』4-1, 明治書院

- (30) 山方純子 (2008) 「日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測—L2 知識と母語背景が及ぼす影響—」『日本語教育』139, pp.42-51
- (31) 大和祐子・玉岡賀津雄 (2011) 「日本語テキストのオンライン読みにおける漢字表記語とカタカナ表記語の処理—中国人日本語学習者の語彙能力上位群と下位群の比較—」『小出記念日本語教育研究会論文集』19, pp.73-86
- (32) Kellerman, E. (1979) Transfer and non-transfer : where we are now. *Studies in Second Language Acquisition 2*, pp.37-59
- (33) Kondo-Brown. (2006) How do English L1 learners of advanced Japanese infer unknown kanji words in authentic texts, *Language Learning 56*, pp.109-153
- (34) Mori, Y. (2003) The role of context and word morphology in learning new kanji words, *The Modern Language Journal 87*, pp.404-420
- (35) Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge; Cambridge University Press
- (36) Pawley, A., & Syder F.H. (1983) Two puzzles for linguistic theory: Nativelike selection and nativelike fluency. In J.C. Richards and R.W. Schmidt (Eds.) , *Language and Communication*, London: Longman, pp.191-226

(久留米大学)

Production of *Wago* Verbs in Context: The Case of Chinese Learners of Japanese

MORIYAMA Hitomi

This study aims to investigate how Chinese learners of Japanese produce *wago* verbs in contextual sentences. The following three research questions are addressed: 1) Are there any differences in the correct use of *wago* verbs in context according to level of Japanese proficiency? 2) Is it a retrieval problem that learners cannot produce correct *wago* verbs although they “know these words”? and 3) What types of errors can be seen in the process of producing *wago* verbs? Two types of tests and follow-up interviews were conducted on 72 Chinese learners of low- to high-intermediate levels. The results showed that: 1) there was a tendency toward production of correct *wago* verbs as learners became more proficient, 2) productive knowledge of *wago* verbs developed later than receptive knowledge, 3) five types of errors were found in the process of production: errors caused by a) incorrect associations with L1, b) transfer of Chinese, c) collocational weakness, d) the sameness of inflected endings written in *kana* in mixed *kanji-kana* orthography, and e) misunderstanding of case particles.

(Kurume University)

日本語会話授業の問題点に対する捉え方 ——中国の大学における日本語専攻の学習者の場合——

秦 松 梅

要 旨

本研究は中国の大学における日本語専攻の学習者の日本語会話授業の問題点に対する捉え方を明らかにすることで、会話教育の改善に向けての示唆を得ることを目的とする。中国黒龍江省の4つの日本語専攻課程を設置している大学において調査を行い、半構造化インタビューデータを基に、KJ法で課題を分析した。その結果、現行の会話授業の問題点の核心は『収穫の少ない会話授業』であることが分かった。この問題の原因は「教師の教え方」と自らの「消極的な授業参加態度」にある。さらに、その背後には「中国の教育システム」、「社会からのプレッシャー」とそれらに対する自らの「心理的な葛藤」があるとして、会話授業の問題点を構造的にかつ自己を内省して捉えている。今後、会話授業の改善に向けては、学習者の主体的な参加を導くようなデザイン及び取り上げる内容を重視し、思考を深め、真正性がある双方向的な活動を導入する必要性のあることが示唆された。

【キーワード】 日本語会話教育、中国人学習者、教授法、主体性、内容重視

1. はじめに

中国の大学における専攻日本語教育の養成目標は、「しっかりとした基礎、高い言葉の運用能力及び比較的高い理論水準を有する、質の高い複合型の高級日本語人材を養成するところにある」(段・陳・崎原・劉 2013:83)。この目標を達成するため、会話授業の目標は、仕事や日常における実際のコミュニケーションにすぐ役に立つような日本語力を身につけることとされている(『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』2001)。このような教育目標の具現化を目指して、教科書や教材開発も急ピッチで進められてきた(曹 2014)。しかしながら、このようないわば上からの教育改革はなかなか末端の現場には届きにくいという問題もある。例えば、教師たちは、目標をコミュニケーション重視としながら、実際の教室活動では、教師コントロールの強い文型練習や自由度の少ないロールプレイが中心となっている(長坂・木下 2011)。

一方、教育改革や授業改善は教師側だけを見ていては達成できない。授業の参加者は教師と学習者であることを忘れてはならない。教師と学習者の当該授業に対する意識が一致していれば、授業はいい方向に進められるが、教師と学習者の間には視点の異なりが存在し、無視できないギャップがあるという(Block 1994, Nunan 1995)。教師と学習者における視点のずれが生じたまま授業が進行していくと、学習者は授業に参加しにくくなり、授